
リング

桜坂 虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リング

【Nコード】

N1079B

【作者名】

桜坂 虎

【あらすじ】

辺境の村に住む少年ハツシュと幼馴染みのライラが過酷な運命に立ち向かう。そして、旅をするハツシュが一つのリングを見付ける。そのリングは世界にいくつかあるリングの一つだった。ある理由で世界に散らばるリングを探すことになったハツシュとライラ。リングを探すうち、仲間にも出会い、森で会った謎の影の秘密も探ることになった。いったい世界に何がおこっているのか…

プロローグ

「もう…そろそろかな…」

森の中で一人の少年が、木にもたれかかり何かを待っていた。

身長は177くらいだろう。

ひきしまった体上半身は裸。

下半身にぎりぎりズボンの役割を果たしているようなボロボロなズボンをはいている。

髪の毛は少し茶色っぽい色をしている。

目が少し青っぽく全体的に整った顔だ。

まあ、顔はかっこいいと言った方がわかりやすいだろうか

歳は16歳くらいだろう。

靴ははいていない。

片手には剣を持っていてもう一方の手には、何も持っていない。

「あ！おーい！！ハツシュ〜！！」

少年…いやハツシュ・アルカベンが木にもたれかかり待っている所に一人の少女が走ってきた。

髪は短めで、目はハツシュと同じように青っぽい。

服は人目で女の子だなと思ってしまうような可愛い服だ。

ズボンは半ズボンをはいていて靴もはいている。

全体的に動きやすそうだ。

身長は160くらいだ。

歳は15。ハツシュより一つ年下だ。

バタフライナイフを二本、装備している。

少女の名前はライラ・ハーレン

両手に腰に

「ライラ…おせーよ。」

剣を地面に立て、溜め息を吐きながら言う。

「ごめーん！！寝てた…」

元気なライラが手を合わせながら必死に謝る。

「まったく…相変わらずだな…。お前から狩りに行きたいっていったのに…」

ハツシュは頭をかきながら言う。

二人は狩りにいくようだ。

「そうだよ　だから楽しみで早く寝れなかったの。」

にこにこ笑いながらハツシュに言う。

「……もういい…行くぞ」

無邪気に笑うライラに呆れながら剣をとり行く準備をする。

「はあい」

ライラははしゃぎながらハツシュの後ろに行く。

「よし…」

ライラが後ろにいる事を確認するとハツシュは歩き出した。

この森は民族の森といって、ハツシュ達の住む村に必要な食糧やい

ろいろな材料が簡単に手にはいるのでこんな名前がついた。それと、今ハツシユ達が行おうとしている狩りも、簡単だ。住んでいる動物は狂暴だが、そこそこ剣が扱えたらまず負ける事はない。

しかも、村の10歳以上の男はほとんど利用しているから、すでに道ができているから迷う事もない。

でも、これは男の仕事だからライラはいけなかったのだが、あまりにしつこいので、ハツシユは連れていく事にしたのだ。

「ねえ、ハツシユ……」

ライラが少し脅えたようにに言う。

「ん……？なんだよ？」

剣を雑に持ちながら、言う。

「……けっこ、暗いんだね……」

さっきまで元気だったのに、ライラは森の予想外の暗さに脅えていた。

だが、暗いといってもそこまで暗くない。

「なんだよ……もう帰るか？」

ハツシユは笑いながらからかう。

「ちょ……ちょっと暗いなって思っただけでしょ……！……ばか……！」

すこし顔を赤くしながら、怒る。

「だよな…。」

笑いながら言う。

「もお…。」

ライラは脅えてた事さえ忘れて周りを見る。

その時、ライラの見ていた辺りがかすかに揺れた。

「…うわ…寒いな…やっぱ服きてこればよ…。」

「ねえ…ハツシュ…！」

ライラがハツシュの話を遮り服を引っ張り、揺れた辺りを指差す。

「…なんだあ？」

ハツシュが呑気に指を指した先を見る。

「今…あそこ揺れたよ…？」

ライラは少し脅えながら腰につけているバタフライナイフを両手に
一個ずつ持つ。

「…お やつと出たか」

ハツシュは動物が出たと思い、待ってましたと言わんばかりの顔を
して剣を構えた。

その時…二人が見ている所から黒い影が飛び出してきた！！

「きゃあ！？」

ライラは急に出てきた影にびっくりして尻餅をつく。

黒い影は尻餅をついたライラに飛びかかる。

「…馬鹿！！なにやってんだ！？」

尻餅をつくライラにいいながらかばうように黒い影を剣で弾き飛ばす。

「や…ごめん！！」

ライラは慌てて立ち上がり、構える。

黒い影は、ハツシュの一撃ですでに死んでいた。

「お 死んだか？」

ハツシュは動かなくなった黒い影に、近寄り調べる。

だが…ハツシュが触れた瞬間、黒い影は地面に溶けていった。

「な…なに！？」

ライラは震えながら後退りした。

「な…！？」

ハツシュは驚きながら、黒い影に触れた手を見る。

そこには、真っ黒な黒い影の血がついていたが、そのうち消えていった。

「なに！？何がこつたの！？」

ライラはまた尻餅をついた。

「知るかよ…！！何かやばそうだぜ？帰るぞ…！！」

ハッシュはライラを抱え村の方に走る。

「わっ！？」

ライラは落ちないようにハッシュの服を掴む

ハッシュがライラを抱え村に走っていくと村に煙が上がってるのが見えた。

「まさ…か…」

ハッシュは村から上がる煙を見て、急いでライラをおろす。

「なに！？どうしたの！？」

急におろされ、尻餅をつきながら言う。

「なん…でもない…。ちょっと待ってる…ここから絶対動くなよ…」

ハッシュはそう言って、村の方へ走って行った。

「ちょ…待ってるって…なに!？」

走って行くハツシユを見ながら、溜め息を吐く。
ライラは村からあがる煙に気付いていなかった。

く指輪く

辺境の村『マサリア』。

森に囲まれた小さな村は、違う町から来る人など滅多にいない。

村から出ていく者も滅多にいない。

空気もきれいで、食べ物にも困らないこの村を出ていく理由がないからだ。

時々、旅人は出たりするが…

「…はあ……。少し休憩するかあ…」

畑仕事をしていた一人の男が自分に言うように言い、道具を置いて地面に座る。

「おおい！！ジエーダさん！！」

休んでいる男の名を呼びながら一人の若い男が駆け寄って来た。

「おお…ガイラ。どうかしたか？」

息を切らせ走ってくる若者に落ち着いた様子で言う。

「はあはあ…村長が…呼んでるよ！！」

この村は小さいからこそここまで走ってきただけで息切れするのはめずらしい。

ガイラは肩で息しながら、ジエーダに用件を伝えた。

「なんだ？何かあったのか？」

ガイラの様子を見て、少し真剣になって立ち上がった。

「ふう……。何かさつき旅人が来て村長と話をしたんだ……。で村長があんたを呼んで来いって……」

急いで息を整えて、できるだけ詳しく説明した。

「旅人？珍しいな……。わかった。すまん……」

息切れするガイラにお礼を言い、村長の家へと走ってゆく。

「で……ここへは何の用で来たんじゃ……？」

村一番の大きな家で老人が椅子に座りながら口を開く。

「はい……。私はある人を探しているのです……。この村に15年前……誰か来ませんでしたか……？」

村長の前に正座で座り、頭を下げながら女が訪ねる。
見たところ旅をしているようだ。

「……はてなあ……。わしももう歳でなあ……。そんな前のこたあ……。覚えてないんじゃないよ。」

少し咳き込み、落ち着いた様子で老人が答える。

「…では、誰か呼んでいただけませんか？」

頭をあげ、老人の目を見ながら女の旅人は言った。

「…もう呼んでおるよ…。もう来るじゃ…」

「村長！私に何か用ですか？」

老人…いや村長の言葉を遮るようにドアをあけ、ジエーダが入ってきた。

「おお…来たか…。のお…ジエーダ…15年前この村に誰か来たかいのお？」

村長は家に入って来たばかりのジエーダに言った。

「…15年前です…か？…ん？あんたが旅人か？女だったのか…」

ジエーダは村長の質問に不思議そうに聞き返し、正座で座っている女を見ながら言った。

「…どうも…シエイと言います。」

女は名を名乗り、ジエーダに頭をさげた。

「…うむ…わしもようわからんのじゃ…。詳しくは聞いてくれ…」

村長はシエイを指で指しながら言った。

「はい……。で…シエイさんとやら…15年前とは…」

ジエーダは村長に頭を下げてから、シエイの前に座った。

「はい…15年前、この村に一人の女の人が来たと思うんですけど…」

シエイはジエーダの質問に詳しく答えた。

「女…？15年前…。…さあ…、来てないだろう…」

ジエーダは何かを思い出したようにしたが、少し間をおいて首をふった。

「…そうですね…。では…私はこれで…」

シエイは立ち上がり、頭を下げて出ていこうとする。

「おい。こんな村まで疲れただろ…」

ドゴオオン！……！

ジエーダの声を遮って家の外から大きな爆発音が聞こえた。

「そ…そんな…」

シエイがその爆発音を聞いた瞬間、腰を抜かし青ざめた顔をして脅えだした。

「なんだ！？！？何が起きた！？」

ジエーダは急いで家の外に出て音のほうへ走っていく。

そこには、炎が舞い上がり家は破壊された悪夢のような村の姿があった。

「クヒ…クハハハ！！」

燃え盛る炎の中から黒いコートを着た男が笑いながら出てきた。

「な…何者だ！？！？」

ジエーダは地面に落ちていた桑を手にとり構えた。

「何者…？クハハハハ！！死ね…クヒ…」

黒いコートを着た男は狂ったように笑いながら、手をジエーダに向け炎の塊を放った。

「な…グワアア！？」

ジエーダは炎の塊をまともにくらい、吹き飛んだ。

「やめてー！！！！」

村長の家から泣きながら出てきたシェイが、黒いコートを着た男に向かって叫ぶ。

「クハハハ！！女あ…やっぱりここにいたな…クヒ…」

男はシェイの方を見て、悪魔のような笑みをこぼした。

「……やめて……やめて……もう逃げないから……許して……」

シェイは泣きながら必死に言った。

「許すう……？あはあ……。いいだろお……クヒ……」

男はそう言つと体を動かさず滑るようにシェイの目の前に来る。

「ひ……この村は……だめ……」

シェイは脅えながら頼んだ。

「クハハ！！クヒ……」

男は笑いながらシェイを抱え、空に浮かんで炎を村全体に放った。

「駄目……いやあー！！！！……」

シェイは叫び、気絶した。

シェイの叫び声は燃える村に虚しく響いた。そして、気絶したシェイの指から一つの指輪がすり抜け、倒れているジェーダの横の地面に落ちた。

「クヒヒ……クハハ！！！！」

燃えていく村を見て男は笑い続けた。
そして、どこかへと消えていった。

く旅出く

「はあはあ……!!……な……んだよ……これ……!？」

急いで走って来たハツシユは絶望してその場で座り込んだ。
それはそうだろう。

さつきまで家があり、畑で仕事をしている人もいて、自分の家もあったのに……今の村は無惨にも一面焼け野原になっていた。
家は灰になり、畑はぐちゃぐちゃ。

もはやさつきまで村だったと言っても誰も信じないくらいだった。
ハツシユは座ったまま地面の砂を握り涙を流した。

「……ぐ……うぁ……」

ハツシユが絶望し、涙を流していると……村の奥からつめき声が聞こえた。

「……!?!?おじさん!!」

ハツシユは泣きながらも声のした方を見て、駆け寄った。

「……ハ……ツシユか……ライ……ラ……は……?？」

声の主はジェーダだった。全身にひどい火傷をおって、確実に助からないだろう。

ハツシユの声を聞いて、ジエーダは必死の思いで声を絞りだした。

「ライラなら無事だよ！お……おじさん！！一体何が……何があったんだよ！？」

ハツシユは泣きながら、ジエーダの方を掴み叫んだ。

「……そう……か……ライラは無事か……。よか……た……。ハツ……シユ……お前に……頼みたい事が……ある……」

ジエーダは痛みに耐えながら小さく微笑み、力を抜きながら言った。

「……何……？何だよ……？」

ハツシユは前が見えないくらい涙を流し、ジエーダの顔に落ちた。

「……泣く……な……男だ……。……ハツシユ……ライラを頼んだ……。あいつは……お前の……事が好きだ……。いつも……あん……な……グフ！？……ハアハア……。いい奴……だ……。……お前には……もったいない……かも……しれないくら……い……だ」

ジエーダは苦しみに耐え、ハツシユを安心させるように微笑みながら言った。

ハツシユは唇を噛み締めながら何度も頷いた。

「……は……は……は……。これも……運命……か……。……そうだ……あそこに……指輪があるだろ……う……」

ジエーダはシェイの落とした指輪を震える手で指差した。

「こ…これ…?」

ハツシユは手の届く距離に落ちていた指輪を拾いジエーダに見せた。

「…ああ…やっぱり…だ…。ハツシユ…その指輪はお前の…母の指輪…だ…」

ジエーダは指輪を見つめ懐かしそうに微笑んだ。

「俺の…母ちゃん…!?!」

ハツシユは指輪を見ながら言った。

「お前は…この村で生まれて…ない…。15年前…一人の女が…この町に…お前を持ってきた…」

ジエーダはもう痛みを感じなかったのか…空を見ながら静かに語りだした。

ハツシユは黙って聞いていた。

いや…驚きで喋れないのかもしれない。

「…女は…こう言った…。この子を…育ててやってください…とな…。…俺は…すぐに受け取ったよ…。…そして村のみなでお前を育てた…」

ジエーダは小さく微笑みながら喋り続けた。

「……ハツシユ…その指輪を持って旅に出る……」

ジエーダは視線をハツシユに向け、真面目な顔をして言った。

「た…び…?」

ハツシユは驚いた様子でジエーダを見た。

「…ライラを頼んだ……。…そういや綺麗な女だったなあ…お前の母は……。…あ…こんな事言ったらあつちで待ってる奴に何されるかわかんねえな……」

ジエーダは目を瞑り微笑み笑った。

「…え…おじさん……?お…い……」

ハツシユはジエーダの体を揺さぶった。

「…随分一人だったから…寂しかっただろ……今…行くよ……」

ジエーダは誰かに語るように息を引き取った。

「おじさん…!?!?…そんな…どうすりゃいいんだよ…ライラは…おい…おじさん…返事してよ……。おじさあああん!…!…」

ハツシユはもう動かなくなったジエーダの胸に顔を押し付け泣いた。片手に指輪を握り締め…

「おっそいなあ……」

ライラは木の根のあたりで隠れるように、座っていた。

と…その時…ライラの後ろで何か動く音がした。

「……………!?!?」

ライラは体を硬直させた。

そしてその音がだんだん近付いてきて、ライラの肩を何か触った。

「キヤアアアア!?!?!?」

ライラは肩に触れた何かを振り払い、その場を飛び離れた。

「うわ!?!?何だよ!?!?!?」

ライラに触れた何かは叫び声に驚き後退りした。

「いやあ!?!キヤア!?!ハッシュ!?!たすけ……………て……………?」

ライラは顔を手で覆いながら叫んで隙間から、何かを見てぽかんと口を開けた。

「…呼んだか?」

何かはいたずらっぽい口調でそう言った。

「ハ…ハツシユ…」

ライラは顔を真つ赤にしながら、目をパチクリさせた。

「…ハツシユ助けて…か…」

指にはめた指輪を見ながら呟いた。

「あ…あれは…ちがうの！！ほら…冗談よ！！」

ライラは真つ赤になった顔を隠しながら言う。

「……行くぞ…」

ハツシユは荷物を持って一声かけた。

「え……？まだ帰らないの…？」

ライラは手の隙間からハツシユを見て言った。
それもそうだろう。

もう辺りは暗くなっていて、森は真つ暗だ。
普通は帰る時間なのだ。

「…あぁ…」

ハツシユはライラの手を掴み無理矢理、森の奥へと進んだ。

「ちょ…どうしたのよ！？おかしいよ…？」

ライラはハツシユの手を振り払い、顔を見た。今にも目が赤く、唇を噛み締めながら何かを耐えているようなハツシユの顔を…

「……………いいんだよ…来い…」

ライラを抱えハツシユはそのまま奥へと進んだ。

ライラは、固まっていた。今まで見たことないあんな顔を見てから…

森はさらに暗くなり、風が木の枝を揺らし奇妙な音を出している。

ハツシユ達は懐中電灯を照らし、奥へ奥へと進んでいた。

ライラも何かを悟ったようにハツシユの後を何も聞かず追う。

そして、二人の前に光が現れた。

月の光だ。誰かが休憩場所を作ったのか、そこ一体の木は切られていて、月の光がさしこんでいた。

二人はそこで足を止めた。

「ねえ…休んでごうよ…」

ライラはくたくたしながらその場で座り込んだ。

ハツシユは何も言わずにライラの前に座った。

そのまま、二人は黙ったままだった。

何分黙っているだろうか…。森から聞こえるあらゆる音が虚しく響く。

「…あたしもう…寝るね」

ライラは軽く微笑みその場で寝転んだ。

「…ライラ」

「ん…？」

ハツシユの呟きにライラが聞き返す。

「……や…何でもない……」

ハツシユは寝転びながら言った。

「そ…じゃ…おやすみ」

ライラはハツシユに笑顔を見せてから背を向けた。

ハツシユは黙ったまま月を見た。

手から指輪をはずし、月の光にあてた。

「な…なんだ…!？」

指輪に月の光を当てた瞬間、指輪が光を放った。まるで森全体が明るく輝いた。

ハツシユは指輪を握り締めた。月の光が当たらない指輪はだんだん光を消えていった。

ハツシユは指輪を握った手を見つめながら、涙が溢れていた。

ハッシュユ…泣くな男だろ……
この子を育ててください……
ライラを頼んだ……
お前の母の指輪だ……

「ハッシュユ…ハッシュユ…!?!」

ハッシュユは涙を流したまま声のする方を見た。

「…!?!?…どう…したの…!?!?」

ライラはその涙を見て驚いた。

ハッシュユが泣くのを初めて見たからだ。

「…ライ…ラア……。どうすりゃ…いいんだよ…なあ…俺は……」

ハッシュユはライラの肩に顔を埋め泣いた。

子どもが泣くように、ずっと泣いた。

「ハ…ッシュユ……」

ライラはそれをただただ受け止めることしかできなかった。

やがて朝がきて、二人は出発しようとしていた。

一睡もできなかつたのか二人とも目が赤い。まあ…ハツシユは泣いたからだろうが。

「おし…行くぜえ!!」

ハツシユは思いっきり泣いて気持ちが晴れたのか、元気よく叫んだ。

「もお…うるさいなあ…」

ライラは言葉とは裏腹に嬉しそうな顔をして言った。

「…そういや…どこ行けばいいんだ…?」

ハツシユは立ち止まり、頭を掻いた。

「もおお…何してんのよお…。…森を抜けたら南に行けば町があるわよ…。…お父さんが言った。」

ライラは呆れ顔になりつつも説明した。

「町…かあ…どんな町かなあ?」

ハツシユは歩きながら、考えた。

「マサリアと関係があるんだから…変わらないでしょ」

ライラは笑いながら言った。

そして森の出口が見えた。

「…よし…行くか…」
「うん!!」

二人同時に森を出た。
そして二人の旅は始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1079b/>

リング

2011年1月29日02時52分発行